

野間宏『青年の環』素描

——融和運動に託されていた「イデオロギー的機能」とは何か

尾西 康 充

1

野間宏『青年の環』の時代設定は、日中戦争開始二年目を迎えた一九三九年七月から、ナチスドイツがポーランドに侵攻した同年九月までとされる。三九年七月、中央融和事業協会の「融和事業ノ総合的進展ニ関スル要綱」と「融和事業完成十ヶ年計画」が改訂された。帝国日本が中心となったアジア協同体建設という政策と一体化した融和事業によって、被差別部落の民衆は、戦争遂行のための人的資源として動員されることになった。『青年の環』では、度重なる皮革統制によって苦しめられていた人びとの姿が描かれている。軍靴などの軍用皮革の需要が増大するにつれて、原料のほとんどを輸入に頼っていた皮革産業への統制が強化され、部落業者の生活は厳しさを増していたのである。

中央融和事業協会の提唱によって進められた「時局下村区産

業状況調査及転業転職状況調査」によれば、大阪府内被差別部落五五地域の一萬四千戸数を調査したところ、一九三九年七月現在、失業または失業状態にある者四、四五六名、転業転職が必要と認める者六、一九八名であった。すでに転業転職した者は予想以上に多く二、二四一名に上った。皮革関係に限定すると、従業員総数七、七〇二名のうち失業または失業状態にある者二、六〇四名、転業転職が必要と認める者二、三九五名、すでに転業転職した者六三九名で、失業率は三三%という驚くべき高さであった。その一方、融和団体が奨励していた満洲移民は一三名にすぎなかった。（融和時報（大阪公道会版）第一五二号、三九年七月）。

一九三八年四月、資源・物資・生産・労働力を戦争に動員する国家総動員法が公布され、六月に改訂物資動員計画基準原則が示された。七月には皮革使用制限規則や皮革製品販売価格取締規則、皮革配給統制規則といった、皮革の使用を大幅に制限する商工省令が公布され、皮革製品の価格と原料配給が商工大

臣によつて管理されることになった。この結果、大阪市内の靴製造業者四〇〇軒余、靴職人五〇〇〇名には牛革がほとんど配給されなくなつて、たちまち彼らは死活問題に直面した。

島崎のモデルであつた全水大阪府連合会委員長の松田喜一は、皮革統制強化に対処するため、一九三八年七月、靴修繕材料の販売を中心とする大阪市内地区出身関係業者が集まつた浪速区経済更生会を結成した。『官製』融和団体である大阪公道会との協力関係を結んだ松田の手腕が発揮され、旭区と浪速区の経済更生会は各々「材料購入資金二、三千円宛」を大阪市役所から借入することに成功した（同「第一四二号、一九三八年九月」）。松田は一〇月には大阪府協同経済更生連合会を組織し、大阪府内各地で原料の共同購入や販売をおこなつた。三九年七月二一日、皮革使用制限規則と皮革配給統制規則が改正されると、鹿皮・猿皮・犬皮も配給統制に加えられ、日本皮革統制会社や日本羊皮統制会社の材料使用も、商工省によつて一括管理されることになった。皮革は小売商同業組合を経て配給されていたが、それが切符制度に替わると、大阪府協同経済更生連合会は商工省や統制会社と交渉し、靴修繕用亀半張の配給を受けることに成功した（同「第一五三号、三九年八月」）。

朝治武氏によれば「水平社活動家は靴修繕業者を組織することによつて、融和団体である大阪府公道会とは別ルートで大阪府や大阪市から団体貸付金を獲得し、部落内において政治的影響力をもつようになった」という。『青年の環』には、「部落運

動の指導者たち」が「事態を收拾することによつて自分達の運動の影響を部落内外にはつきりとうえつけそしてその地盤にたつて強力な発言を政府に向つてして行こう」としていた姿が描かれている（『皮の街』）。大阪府協同経済更生連合会は、軍需関連産業への転業と満洲移民を奨励していた大阪府公道会に協力し、失業職工救済のために代用編上靴（軍靴）製作講習会を開いたり、「満支商工従事者養成」のために大阪外国語学校教授による「支那語講習会」を開いたりした。さらに満洲視察団を組織して、同連合会設立一周年に合わせて報告会を催すなど、国策遂行に全面的に協力するようになっていた。

松田を含む全水左派メンバーは、大日本青年団本部の北原泰作や、元中央融和事業協会主事で産業組合中央会の山本正男たちの大和会に連絡をつけ、「一君の下に万民の協同体を作る」という「革新的共同体」構想の下、「まず国家協同体の基本単位となる部落協同体を確立し、身分的差別はその間に於て解消する」ために「全水の組織は当然解消されなければならぬ」と考えていた（『社会運動の状況』一九三九年）。

だが、全水中央執行委員長の松本治一郎は、満洲移民政策は「部落民の国外追放政策」でしかないと非難した（『特高月報』三九年八月分）。野間宏自身がモデルとなつた矢花正行もまた、「自分のする仕事、自分の全力をつくしてやろうとしている仕事は社会事業であり貧民のための仕事であるというが、実際その内容をよく考えてみればむしろそれは戦争のために役立つて

いるにすぎないのではないかという疑問」を抱いていたのである（『皮の街』）。

社会主義革命によつて差別を解消することを第一義とする水平社運動史では、革命への意欲を減退させる改良主義的性格を持っていたという理由から、融和運動にはネガティブな評価しか与えられてこなかった。階級闘争を激発させて部落解放を実現しようとしていた全水創立当初の原則論からいえば、大阪市役所社会部福利課に勤務して融和行政に携わっていた野間は、『天皇制ブルジョア融和主義』に協力していたにすぎない。

「融和事業完成十ヶ年計画」を立案していた地方行政の社会課官僚には差別的態度——「賤視的融和方針」（三木静次郎——）があると批判されていた。中央融和事業協会の山本正男でさえ、当時の融和団体が「何等大衆的基礎の上に樹たず、役職員の名を冠せられてゐる少数の智識階級と、関係官庁の官公吏とによつて構成されてゐることを否認ない。しかもその運用は、完全に所謂官僚支配の下にある」とみていたのである。

『青年の環』でも、「もつともこの部落問題を取扱ふ部落更生事業はこの福利係長の担当する事業のなかでもつとも順位の低い事業」でしかなかった。「部落更生事業のやうな労多くして功少く、その上何か予期できぬやうな突発事件が発生すれば直ちにその責任をとられなければならないやうな事業に身を入れるといふことは馬鹿げたことであると考へるのが普通一般の常識であつたであらう」と描かれている（『魂の煤煙』）。

日中戦争が泥沼化するなか、松田や野間たちは、その限界を知りながらも、『水融合体』の運動体に人民戦線の最後の可能性を賭けていた。だがその一方、もはや融和運動にしか社会主義革命のエネルギーを望めないとする社会的現実の認識は、転向を擬装／隠蔽する『イデオロギーの機能』として働いていたのではなかったか——。矢花正行は、すでに転向してしまっているにもかかわらず、それがみえないような位置に主体を描こうとしていたのである。暴動を起こす「部落の人びと」は、矢花の主体を構成する幻影であつたのではないか——。

2

融和運動を再評価する秋定嘉和氏は、同和対策審議会答申（一九六五年）から同和対策事業特別措置法施行（一九六九年）によつて、「それ以前からの行政闘争の成果とあわせて部落の社会的経済的变化は大きく、差別解消への何らかの寄与をもたらす条件をつくつたことはあきらかではなかったか」と問題提起した³。そのうえで、自分は安全な場所にながら、充足できない自分の願望を解放運動に投影し、彼らに犠牲を払わせることを通じて、ある種のカタルシスを味わっている「一般民」の欺瞞を暴いた。

たとえば身分差別と階級的貧困という二重の差別をうけ、最も矛盾の集中したところであるというのは、理論的

にそうであるにしても、それが社会主義革命との連結でしか解消しないとするのは、一つの現実無視と論理飛躍があるのではないか。差別がきびしいということは資本主義社会の階層のなかで、より即時的に、せめてブルジョア的に、一般民と同じように解放されたいと願ってはいけないことなのか。現在の秩序が保守的で、体制的であるから、そのなかでの解決は、本当の解決にならないという意見は、その歴史的段階や階段的身分的位置を体験し、経過し、絶望して批判する一般民の言うべきことであり、まだ、それを体験していない被差別の側に一般の側からとりわけ強調すべきではないと思われる。とくに、戦前からの、孤独な左翼革命の強力な味方としてあつてくれという願望はこのあたりで反省すべきではないかと思う^①。

秋定氏は権力追従の態度を容認している訳ではなく、水平社運動も融和運動も最後は、天皇中心の国家主義に転落してしまつたことを非難したうえで、部落解放運動と社会主義革命を分けて考える必要性を説く。「最も差別された人々が人間回復をはかるとき、原理的には敵対せねばならぬ天皇制が臣下の平等(日本的天賦人權論の変型)を主唱していたことこそ、このテーマにまつわる幻想と矛盾の結節点ではなかったか。それだけに被差別民の側からする天皇制糾弾は一般民側よりもさらに重苦にみちた作業をともない、この課題は、いまなお果たせないまま続

いているのではなからうか」と、部落解放運動のなかに深刻な矛盾が孕まれていたことを指摘したのである。天皇制と部落解放は、日本社会の矛盾を最も象徴的に体現したテーマである。

さらに秋定氏によれば、「最近のファシズム研究」には「戦時下の権力の民衆統合操作を重視する視点から、権力に依拠しながら社会変革に関与しようとする民衆の積極性」がみられたことを評価するものがある。「権力内部でも「天皇制国防国家派」と「天皇制権威主義的民主主義派」の対抗があり、また社会のなかで、経済的、社会的な流動性(平等化・近代化)をもとめる動向」のあつたことに着眼した研究も現れているという。

聖、戦、遂行のためには労働力を保護して生産力拡充に努めなければならぬとする風早八十二や大河内一男の生産力理論は、戦時統制経済を積極的に支持する一方、社会政策は人道主義やマルクス主義によつて導かれる救貧事業ではなく、資本主義体制を維持するためには不可欠の、社会的総資本にとつて合理的な手段であると主張した。大河内は「人々は今や「厚生」又は「厚生事業」といふ言葉をもつて、この社会事業の新たな反省を言ひ表はさうと試みてゐる」と述べ、マルクス主義退潮後の左翼知識人を鼓舞し、労使一体の官製労働組織である産業報国会の活動を推進したのである。一九三九年当時「厚生」という言葉が流行つて、舞踊サークルも「厚生舞踊研究会」という名前に替えたとき、大道陽子が矢花正行に伝えていた。「華やかな色どり(二)」

このような生産力理論は、松田のような、経済更生運動をはじめていた全水左派メンバーにも影響を与えていた。秋定氏によれば、彼らは「部落産業の近代化と移民・雇用拡大の機会の積極化を提唱、差別糾弾も配慮」して、「時局の深化とともに地方行政のなかの「同和」行政を多くの融和運動家とともに担当しながら、戦時下の生活難を苦慮しながら打開する姿」を示していたのだが、それは「しばしば擬装「転向」ととられた」とする。

矢花と矢野元治が武庫川の堤防沿いの道を歩く場面で、「フロン・ポビュレールは彼等の祖国だった。或いはもつといいかえるならば、過去の祖国だった。しかしいまそれは、刑務所のなか以外どこにも存在しなかった。そして彼等はなおそれをそのように考えて、なおそれに執着していたのだ」と描写された（美しい夜の魂）。《水融合体》の浪速区経済更生会に、松田や野間たちは「人民戦線の新しい展開」を期待していたことが分かる。

しかし中村福治氏によれば、野間や羽山たちの人民戦線運動には、「風早八十二の生産力理論の亜流的形態」としての評価しか与えられない。風早は官僚主導の産業報国会を活用しながら、それを「人民に有利なものに転化させよう」と考えたものの、「ついには昭和研究会に迎えられ、新体制運動のイデオローグに「上昇転化」してしまったのである。

一方、野間らは人民戦線運動敗北後の困難な中、運動再建の手がかりがつかめない状況下に、経済更生会こそが人民戦線の組織であると考え、それが皇民運動、日本建設協会と結合し、それらの国家主義団体の活動の一環に組み込まれ、高度国防国家を部落で支える機関に「上昇転化」してもなおかつ人民戦線の形態であると思ひこんでいるのである。

中村氏はこのように言及したうえで、野間たちは「擬装から真実の転向へ」と移ったわけではなかったが、「擬装以外のなものもない」状態であつたと評価せざるをえないとする。軍国主義と侵略戦争に対する抵抗のモーメントは失われ、擬装すること自体が活動の目的になってしまっていたというのである。

彼らの眼には、融和運動が最後に残された「左翼運動」として映っている。だがそれは社会主義革命の主体となることを欲望するものの、実はすでに転向してしまっているという裂け目——「自分の欲望の〈現実界〉」——から眼を背けるために構成された「社会的現実」ではなかったか。スラヴォイ・ジジェクによれば、「イデオロギーの機能」は「われわれの現実からの逃避の場を提供することではなく、ある外傷的な現実の核からの逃避として、社会的現実そのものを提供することである」。被差別部落以外の社会運動は壊滅し、もはや融和運動にしか社会主義革命の可能性が望めないと描写された『青年の環』の「社

会的現実^{ソリダリ}」は、矢花／野間が目を背けようとしている、転向という「外傷的な現実^{リアル}の核」を擬装／隠蔽するものであったといえよう。

皮革使用制限規則という第一回目の統制令（一九三八年七月）が出されたとき、矢花は部落の「代表者達と一緒になつてその混乱の收拾にあたつたのであるが、当時はそれ以外にはなんの方法もなかったといつてよいだろう」とする。だが「平和産業としての部落の皮革産業を軍需工業に急激に切りかえる」ことが「一応成功しはじめるや」、「軍需産業として出発し直した一部の間にはむしろ従来以上に資金の流入が見られる」ようになった。生活擁護といいながら戦争遂行に協力する結果におちいったことに矢花自身は内心で不満を抱いていた。しかしその不満は「日本の政治がいつも部落を犠牲にして行われてきた」という事実から、「日本の国内に大きな混乱がまき起らない限り、部落の人々も彼自身も、……つまり支配される人間は全く救われることがないのだ」と考えることによって霧散されてしまふのであった（「皮の街」）。

生活擁護闘争を貫徹するというのは、島崎にとっては思想を一貫させる以上に重要な取り組みであったのだが、矢花にとって融和運動は自己の転向を擬装／隠蔽するための格好のレトリックであつたのではないか。シジエクによれば、「イデオロギー的な「ユダヤ人」像」はヨーロッパ人の「自分の欲望の行き詰まりを打開するためにその像をつくりあげたのだ」という

のだが¹³、矢花が抱いている、「大きな混乱」をまき起こす「部落の人びと」というイメージには、矢花の「無意識的欲望が反映している」といわざるを得ない¹⁴。自分たちの手によって社会主義革命をなし遂げられなかった代償を、「部落の人びと」に払わせようとしていたようにもみえるのである。

『青年の環』が描き出した浪速区経済更生会の活動は、『水融合体』の成功例とされているのだが、矢花が関わっていたとされる融和運動を、つぎに検証してみよう。

3

一九二八年の三・一五事件と翌年の四・一六事件によって全水左派メンバーが一斉検挙され水平社運動の『沈衰』と『凋落』が生じると、二九年一月、昭和天皇の即位を記念して開かれた全国融和団体連合大会で、中央融和事業協会は「内部同胞ノ自覚向上ヲ促シ共存共栄ノ実現ヲ期ス」という内部自覚運動を提案した。この運動は差別の原因を、従来は反省や懺悔を一般（差別者）の側に求めていたのに対し、「部落民の自覚」なくしては、「一般民の自覚」を促すことの困難¹⁵があるのを訴えて、被差別の側の意識変革を求めたのであった。山本正男によれば、「部落民の自覚」を「新しき指導方針」とする融和運動は、「水平運動の衰微によつて消失せんとせる部落大衆の自覚意識を直接的に融和運動それ自体が把握せんとする」ことを通じて

「社会運動の領域に進出せしめんとする」ものであった。¹⁶⁾

昭和恐慌の長期化による失業者増大と農山漁村経済の破綻、欠食児童の増加とを懸念した政府は、地方改善応急施設費を予算化して部落経済更生運動をはじめた。この運動は、自力更生の精神が原則とされ、同情的恩恵にもとづく施策では差別は解消されないと水平社運動の精神に通じるころがあった。一九三二年の部落経済更生運動から三五年の「融和事業完成十ヶ年計画」、そして四一年の同和奉公会の成立へと至る三〇年代から四〇年代までの融和運動には、部落解放運動の主体になろうとする積極的な姿勢がみられた。

他方、全国水平社は改善費闘争を基本とした部落委員会活動（一九三三年）によって融和運動への対抗を試みた。秋定氏によれば、「それまで改善費で部落ボスに押さえられていた部落に、新しく改善費闘争をやった時に、それと闘える組織を全水の下部が持っているかどうか」がポイントであった。「改善団体のボスが、生活から職業の世話まで含めて全部作った」のに反発して全国水平社が結成されたものの、全国水平社が負けるケースが多発した。そこで改善費闘争でもう一度対抗しようとしたことから、「当然、部落のボスは自分が支配している居住村の秩序を動揺させるものとして怒」ることになったのだが、秋定氏は「これが本当の解放運動であり、解放運動の第二段階の始まりだ」と意味づけた。松田が活動した浪速区（西浜）でも「部落ボス」は強い影響力を持っていた。松田の盟友・木村京太郎

は、松田がその地で苦勞して水平社を結成した経緯をつぎのように回想している。

当時の西浜は日本で一番大きな部落で、皮革の製造加工の本場であったから、資本家（親方）たちの保守的な勢力が強く、その人たちの支持で代議士になった沼田嘉一郎（政友会所属）が町内会や青年団を牛耳っていたので、大正七年夏の米騒動のときも、その力で町民の参加を阻止したのであった。こうした所であるから、革新的な水平運動には反対で、演説会を開くのにお寺や学校に圧力をかけて会場を貸さないとか、街頭演説も警察が干渉し、手下の暴力団に暴れ込ませるなど、さまざまの妨害があった。¹⁸⁾

「部落ボス」の問題は『青年の環』でも、高利貸の支配を基盤にした有力者・亀多田宗太郎の姿を通して描かれているが、部落解放運動の理論史においても、部落内階級闘争第一主義と労農水統一戦線主義との違いが表面化していた。部落内階級闘争第一主義の典型は、高橋貞樹『特殊部落一千年史（水平運動の境界標）』（一九二四年五月、京都更生園）にみられる。高橋によれば、資本家経済の発展に伴う部落民衆の有産者と無産者との階級分解が進展しているかぎり、ブルジョア民主主義的課題が実現しても無産部落民は解放されないとする。この考え方は水平社解消論という全水左派の考え方——全部落民を結集して差別的

待遇を撤廃しようとする水平運動自体を否定し、水平運動を無産階級運動に同化させる——につながる。

他方、労農水統一戦線の主張は、労農派経済学者の櫛田民蔵「対角線的に観たる水平社問題」（『我等』第一〇年第五号、一九三三年五月）にみられる。櫛田によれば、部落内には階級分化がみられるが、部落無産者は、差別的観念を解消するための身分闘争において、部落資本家・中間層との統一戦線のみならず、階級的利害に立脚した部落外の一般労農との共闘も可能であるという。矢花正行が「部落に対する革命的な望み」を抱いていたように、野間の考え方は、全水左派に属していた松田と同じく部落内階級闘争第一主義であつたように思われる（『皮の街』）。

民衆蜂起を期待する矢花は、島崎から「一揆主義」だとたしなめられる（『裏と表と裏』第六部第一章）。藤谷俊雄氏は、「戦争とファシズムが激化してゆく反動期の孤立感の中で、反戦思想をいなくインテリ青年が、戦時統制に抵抗して生活をまもる努力を続けている部落大衆に「期待」をもとうとした心情は理解できるけれども、客観的に見れば、観念的な革命論者の幻想であつて、歴史的な部落解放運動とは縁のない無責任な発想といわねばならない」という。差別を受けて生きる人間が平等等を是正しようとする欲求を強く持つのは当然であるが、過酷な弾圧が予想されるなかで蜂起の責任をその人たちの肩に背負せようとするのは、欺瞞そのものである。

戦時統制が強化された日本社会において、人民戦線運動の試

みは潰えたかのように思われたが、矢花は「日本のもつとも下層に追いつめられてきた特殊部落には日本の労働者さえも持っていないような人間尊重の心があることを知って、力を得ることが出来たのだ」と考える（『皮の街』）。民衆のエネルギーを感じて、「部落のなかには解放があつた……いや長い年月人々から差別され賤められてきた特殊部落の人々には解放に対する限らない欲求があつた。そこには日本の如何なるところにも見出すことのできない「人間」に対する愛があつた」とする。だが藤谷氏によれば、このような矢花の認識も、「当時の労働者・農民の抵抗運動は全く存在せず、部落だけが抵抗の拠点であつたとする作者の歴史観」に由来する。『青年の環』の描写が「観念と現実とを勝手につなぎ合わせたようなものとなっていて、現実をかれの観念によってゆがめて描いている」のは、「かれの戦後の転向とかかわりあることであろう」というのである。²⁰

野間の「戦後の転向」とは、一九六四年に野間が日本共産党を除名されたことを指しているのだが、津田孝もまた、『青年の環』改訂に際して大道出泉の転向を「多少とも批判的に見るべきかたは、歯切れの悪さだけはいささか残っているが、改訂後は完全になくなってしまった」とする。改変箇所を具体的に指摘すれば、「炎に追はれて」のなかで、「彼はのがれた。彼は逃げた。確かにそれは逃げたのだ。どういう理由がそこにつけられようと、それはそうである」という表現が「俺は決して逃げたのではない。俺は逃げたりはしない。俺はのがれたりは

してない。絶対にしていいない」に書き換えられている。津田によれば、書き換えの原因は、「革命運動の組織に戦後再接近していた一九四八年当時の作者の思想と、再び運動からの離脱と対決へ向かうにいたった一九六〇年代の作者の思想のちがいが、なまのかたちで作品に投影している」ことであつたとし、改訂版『青年の環』の主題の一つが「作者自身の一九六〇年代における革命運動からの逃亡と「転向」の自己救済でもある」と非難したのである。

だが、ここで「転向」とは何かをもう一度問うてみる必要があるだろう。社会運動の成果は、特定の党派による党方針の達成度に従つて測られるものではないし、転向の定義は、ある特定の政党から除名されることを意味するものでもない。白か黒かという明確に判定できるものではなく、「転向のイデオロギー」は、その場を生きる人間がその本質に気づかないことを前提としているような社会的現実のなかに書き込まれているのである。

たとえば、一九三八年一〇月の大阪府協同経済更生連合会の設立総会は、府社会課長による開会挨拶の後、「一同宮城遙拝、戦死者並に皇軍武運長久等の黙禱をなし声高らかに国歌を斉唱」（『融和時報（大阪公道会版）』第一四四号、三八年一月）している。さらに三八年一二月の浪速区経済更生会の臨時総会は、松田会長による開会の辞の後、「宮城遙拝、君が代合唱、英霊へ感謝の黙拝」をおこなっている（同「第一四六号、三九年一月」。これ

らの所作は日常生活で繰り広げられる習慣と化していたために、もはや意識に上らない社会的現実となっていたのである。転向が常態化したこのような光景は、『青年の環』では一切描き出されていない——このとき転向のプロセスはすでに完成していたといえるのである。

日中戦争開始後の一九三七年から三八年にかけての二度にわたる人民戦線グループ一斉検挙事件によつて、反戦反ファシズム闘争は壊滅され、全国水平社は「非常時における挙国一致」体制に組み込まれることになった。三八年二月の全水第一回中央委員会では、「現下戦時体制下に於ては国難に殉じ」、「国内の相剋摩擦の解消、挙国一致の立前からなされる革新政策の遂行は当然に部落問題をも解決し得ることと堅く信ずるものである」という声明を発表した。さらに同年六月の全水第二回中央委員会では、「融和事業完成十ヶ年計画」を排撃してきた方針を「融和事業施設の拡充」に転換したのであつた。

4

中央融和事業協会の機関誌『融和時報（大阪公道会版）』第一三六号（一九三八年三月）巻頭には、「水平運動の大転換／闘争主義へ」「サヨウナラ」大日本青年党へ／近畿全組織に大衝動」という見出しが掲げられていた。

わが左翼陣営にあつて不斷に尖鋭な態度を持し來つた全国水平社内部に從來の闘争組織両方針を現下の非常戦時体制に処して百八十度の根本的大転換を試みるべく、新しい動きが表面化するに至つた（中略）人民戦線派総檢舉に次ぐ日労党解散の新事態を前に俄然関西の中間派間に、徒らに左翼固執主義を捨て絶対日本主義へのイデオロギーの清算を行ふと共に、闘争組織両面の再検討の要が叫ばれるに至り、先づ全水大阪府連中央委員長松田喜一氏外幹部十余名に組合数十名は大日本青年党に、個人の形式で正式加入、同党との密接な連繋のもとに新政治闘争への転換を導くと共に組織経済闘争の拡大強化を図ることとなつた。

この記事によれば、全水大阪府連の「大転換」は、府内全域のみならず近畿の全組織に「極度の衝動を与へる」に至つた。今後、全国水平社は「天皇帰一」のイデオロギーへと転換することが予想され、創始者の一人である西光万吉が「加盟」していた右翼組織・大日本青年党に、他の全水地方組織も加わるのが「必至の形勢」になつたと報じられている。

一九三八年十一月の全水第一五回大会では、「我等は集团的闘争を以て政治的、経済的、文化的全領域に於ける人民的權利を擁護伸張し、被圧迫部落大衆の絶対解放を期す」という綱領を改訂し、「国体の本義に徹し国家の興隆に貢献し、国民融和の完成を期す」と明言した。経済更生の重要方針として、部門

別に協同組合を組織し、原料の共同購入や価格の統一、販売の協力などを通して生産拡充に努める銃後部落厚生運動を決議した。《水融一体》が進むなかで、それらが「依拠した国家がファシズムに、内部自覚が民族主義思想に彩られたとき、それは後には軍国主義的統制経済（全体主義国家）に吸収されてしまう」のであつた。²³

さきに引用した記事にみられるように、松田が大日本青年党に入党したのは「全水運動の沈退はその運動方針が当時に於ける客観情勢を無視せるが爲にして、之を打開するにはその当時の社会情勢に合流するを要すべく、現在に於ては右翼団体との提携を第一義とすべし」と考えたからであつた。しかし、マルキシズムによる強い影響を受けていた全水左派の松田の行動が擬装であつたとみなされていたのは、府警特高課からも「時局柄きわめて不利なる客観情勢に逢着して案出せる自己防衛の一策なりと認めらるる疑いきわめて濃厚」で「その発展性に乏しく、たとえ全水の右翼転向実現の機に至るもその具体化は至難なるものと想像せらる」と考えられていたことから分かる（『特高月報』一九三八年一月分）。

松田は一九三九年になると、岡山・野崎清二、京都・朝田善之助、三重・上田音市といった全水左派メンバーたちとともに行動し、全水解消を策謀する。彼らは、全水総本部派の松本治一郎たちの「伝統的社会民主主義的指導精神」に対抗し、「協同体の一君万民の国民運動」を提唱して部落厚生皇民運動をは

じめる。彼らが日本建設協会や皇民協同党、大日本青年党などの右翼団体と連携し、時局に便乗しようと試みていたにもかかわらず、社会大衆党支持の全水総本部派からみれば、彼らには「左翼的イデオロギー残滓の片鱗」がみられるのであった。

全水解消派によって示された運動方針——「盛り上る下からの大衆組織を結成し、その国民的政治勢力によって資本主義機構を打倒して革新断行に邁進すべき」（『特高月報』一九四〇年六月分）——などは、「いわゆる思想転向者の擬装運動にほかならず、全水としては格別の打撃あらず」ととらえられたのである（『社会運動の状況』一九四〇年）。

一九四一年四月一日、全日本靴修理工業組合連合会を結成しようと奔走していた松田は、治安維持法違反の容疑で検挙された。府警特高課から「部落民の経済厚生を藉口して之を部落大衆結集のより所となし、階級運動に利用せんとするの恐れ多分に認められその推移相当注意の要」があると警戒されていたのである（『特高月報』四二年六月分）。

5

矢花正行は、大阪市による「現状糊塗的な方針」を早急に転換する必要があると考えていた。

これまで主として懇談会などのやうな会議費に置かれて

ゐた事業予算の中心を、生活指導費に移し、一挙に予算の増額を計上すること、更に転業資金を現行の三百円から倍額の六百元に増すこと、物資統制によりもつともひどい打撃をうけた靴製造及靴修繕業者の組合に対して、生業資金の団体貸付を無制限に、従来よりもさらに低利で行ふことなど（下略）

（『魂の煤煙（二）』）

矢花は政策転換を具体的に考えていたのであるが、野間宏は浪速区経済更生会に、実際どれほど関わっていたのだろうか。融和運動の関係資料にもとづいて、野間の足跡をたどってみよう。

一九三九年四月一日、浪速区経済更生会第二回総会が榮第二小学校で開催された。来賓と会員あわせて七〇〇名が集まった。「融和時報（大阪公道会版）」第一五〇号（三九年五月）によれば、大阪市役所から来賓として古藤敏夫福利課長と「野間宏書記」が出席した。

四〇年になると、浪速区経済更生会は「約五百五十名余の会員」を獲得し、「腹心たる山本鶴男（左翼分子）」を書記として「（イ）文庫設置、（ロ）講習会・講演会の開催、（ハ）中堅幹部養成講習会の開催、（ニ）特別会員の獲得（内職関係者）、（ホ）慰安会の開催等」を計画したとされる（『特高月報』四〇年七月分）。

「融和時報（大阪公道会版）」第一六二号（四〇年五月）には、浪

速区経済更生会の発展がつぎのように報告されている。

浪速区経済更生会の材料共同購買部は最近頃に発展し毎月一万円近くの売上を見る様になったが、此の成功振りに発奮した幹部は二千六百年記念事業として

(一)、家庭の夕べ、を催し婦人や家庭の中へ更生運動を持込むこと。

(二)、青年講座を開くこと等を協議し四月七日から毎月七日と二十一日に大阪市の福利課の野間氏を招き経済学日本歴史其の他一般常設の講座を開いて居る。現在参加人員十五名いづ「れ」も熱心なる青年である

右の記事には、野間が「経済学日本歴史其の他一般常設の講座」を開いていたとある。大正の米騒動以来の「暴動」を警戒して「赤化」を恐れていた陸軍憲兵隊でさえ、松田の目が光っているために立ち入れなかった場所で、野間はひそかにコミューンの実現を企図し、マルクス主義経済学や唯物史観を教えていたのである。差別された場所にしか自由な空間が残っていないかったという逆説は、野間の偽らざる本音であつただろう。『青年の環』には、矢野元治が矢花と一緒に浪速区に出かけた体験を、大道出泉に話して聞かせる場面がある。矢野によれば、相談に訪れる人びとから「矢花先生」と呼びかけられるほど、矢花は信頼が厚いのだという（小無頼）。

大阪市内の経済厚生会は、浪速区以外でも活動が活発化し、一九四〇年四月三〇日、西成区経済更生会が今宮第七小学校で開催され、大阪市から「福利係野間書記」が出席した（同）第一六三号、四〇年六月）。さらに六月一二日、大阪市北区経済更生会の第四回総会が豊崎衛生会館で開催され、大阪市からは古藤福利課長と「野間書記」が出席した（同）第一六四号、四〇年七月）。

全水左派の松田が全水解消を画策してはじめた部落厚生皇民運動全国協議会の第一回全国会議が一九四〇八月二八日、浪速区の有隣勤労学校と栄第二小学校で開催された。このとき来賓として「大阪市役所社会部野間宏」が出席している（「特高月報」四〇年八月分）。別の資料では、この会議に野間は「浪速区経済更生会中堅幹部養成講習会講師」という肩書で出席し祝辞を述べたとある（「皇民運動」第二号、四〇年九月）。

近衛文麿首相による新体制運動がはじまると、融和事業の《新体制》を推進する大阪協議会に、野間は大阪市役所書記として参加し、四一年一二月一〇、一一日に奈良県橿原市で開かれた紀元二千六百年奉祝全国融和団体連合大会に出席した。厚生大臣諮問「融和事業ヲ一層徹底セシムルノ要アリト認ム仍テ之カ方途ニ関シ其ノ会ノ意見ヲ諮フ」に関する答申を討究する研究委員に選ばれている（「融和時報（大阪公道会版）」第一七〇号、四一年一月）。それと同時に文部大臣諮問「融和教育ヲ一層徹底セシムル具体的方途如何」に関する答申案の起草委員の一人にも選ばれている（「融和時報」第一七〇号、四一年一月）。

野間は、一九四一年一月六日の浪速区経済更生会の第四回評議会に出席し（融和時報（大阪公道会版）第一七一号、四一年二月、一月三〇、三一日に大阪府立青年塾堂で開かれた融和促進運動指導者養成講習会に大阪市を代表して受講した（融和時報 第一七号、四一年三月）。さらに七月八、九日、修養団関西道場で開かれた融和事業関係地方青少年団幹部講習会に大阪市から講習員として出席していた（同）第一七七号、四一年八月）。

これらの資料からは、野間の活動とともに、『青年の環』の作品背景になっている大阪市社会部福利課の動向がうかがえる。『青年の環』の矢花は「浪速区の東端に位置する貧民街の小学校の中に二ヶ月程前から建設中の職業転換施設に関する書類」を職場の机上に広げているが、この施設は実際に四〇年九月に設立された有隣職業教習所であった（『魂の煤煙（一）』）。『大阪市社会事業要覧』（昭和一六年版）によれば、「本教習所は産業報国の主旨に基き機械工の養成を図り、事変下に於ける労働力の拡充を目的として建設せられたものである」と説明され、建設費は二万三千五百二十円、木造平屋建六〇坪で、学生の定員は昼間部の第一部（高卒以上）四〇名、第二部（高卒以上）二〇名、夜間部速成科二〇名であった。²⁴

ちなみに『青年の環』に登場する三浦市長は坂間棟治、アメリカ留学の経歴を持つ那須助役は森下政一、「自由主義的な開放精神の持主」（『魂の煤煙（三）』）とされる大浦社会部長は田坂茂忠、池上福利係長は増田裕治、浪速公民館長は望月武夫がモ

デルになっていたと考えられる。²⁵

6

一九三七年一〇月現在、浪速区経済更生会に属する地域人口のうち朝鮮人が九・六%を占めていた。『特高月報』（三八年五月分）によれば、「殊に在阪朝鮮人の皮革業界への著しき進出は内地人業者に多大の脅威を与えつつあり。即ち之等朝鮮人は低廉なる労賃と頑健なる体力により漸次業界を侵食しつつあり」とされた。その当時「朝鮮人業者は製靴材料の入手及び販路の統制を図る目的」から「株式会社厚生会（資本金五千円）の組織計画を立て奔走中」であった。松田喜一と大阪市会議員の栗須喜一郎は、朝鮮人労働者による「脅威」への対策を「考究中」であるとされ、府警特高課は「将来之等両者の動向相当注意を要すべきものあり」と警戒していた。朝治武氏によれば、「経済更生会は靴修繕業者などを組織して部落民衆の生活を擁護しようとするものであったが、一方では朝鮮人の部落居住による皮革業進出に対抗しようとする排外主義的な一面をもっていた」という。²⁶

差別を解消し経済格差を是正する民主的な目的を掲げた融和運動は、最後は天皇中心の国家主義に転落し、「排外主義的な一面」を抱える結果を招いてしまった。ジジエクによれば、「民主主義はつねに腐敗や退屈で凡庸な支配の可能性をとまなう

が、問題なのは、この内在的な危険を避けて「真の」民主主義を回復しようとする企てはすべて必然的結果としてその反対のものを生み出すということであり、結局は民主主義を廃絶することになる」という。このようなアイロニーに満ちた「企て」は、ついには「全体主義的テロリズム」に墮するとさえいわれているのだが、「日本の如何なるところにも見出すことのできない「人間」に対する愛があつた」と美化された民衆は、みずからの解放を「国民融和」への道に求めて戦争協力に動員されてしまう結末におちいったのであつた。

注 『青年の環』には、今日では使用しない差別的な言葉が含まれているが、当時の社会背景を知るために、学術的な観点から原文のまま引用した。

『青年の環』の本文は初出版に拠つた。『青年の環』第一部は「華やかな色とり」（『近代文学』第二巻第四、五、六号、一九四七年六、七、九月）、「魂の煤煙」（『近代文学』第二巻第七、八、九号、一九四七年一〇、一一、一二月）、「現実嫌悪」（『近代文学』第三巻第二、三、五号、四八年二、三、五月）、「炎に追はれて」（『文藝』第五巻第八号、四八年八月）、「小無頼」（『新文学』第五巻第九号、四八年一〇月）、「化粧」（『新文学』第五巻第一〇号、四八年十一月）、「家の中」（『丹頂』第一巻第七号、四八年十一月）、「盛り場の店」（『序曲』創刊号、四八年二月）。第二部は「美しい夜の魂」（『文藝』第七巻第一号、四〇年一月）、「投網」（『文藝』第七巻第二号、五〇年二月）、「邪教徒」（『文藝』第七巻第二号、五〇年二月）、「跛行」（『文藝』第七巻第三、四、五号、五〇年三、四、五月）、「徴兵忌避」（『文藝』第七巻第五号、五〇年五月）、「皮の街」（『文藝』第七巻第六号、五〇年六月）である。『融和時報』は復刻版から引用した。

- (1) 朝治武『アジア・太平洋戦争と全国水平社』（二〇〇八年八月、解放出版社、六二頁）
- (2) 山本正男『岐路に立てる融和運動』（『社会事業研究』第二〇巻第四号、一九三〇年四月）、引用は大阪入権博物館編『山本政夫著作集』（二〇〇八年三月、解放出版社、二二二頁）からおこなった。
- (3) 秋定嘉和『近代日本の水平運動と融和運動』（二〇〇六年九月、解放出版社、一五頁）
- (4) 同右、一六頁。
- (5) 秋定嘉和『近代と被差別部落』（一九九三年三月、解放出版社、五二頁）
- (6) 前掲(3)、四〇二頁。
- (7) 大河内一男『我国社会事業の現代的課題』（『総動員態勢下に於ける社会事業』一九四〇年五月、全日本私設社会事業連盟、一四頁）
- (8) 前掲(5)、五〇頁。
- (9) 中村福治『戦時下抵抗運動と『青年の環』（一九八六年一〇月、部落問題研究所、一八五頁）。
- (10) 同右
- (11) 同右、一八六頁。
- (12) スラヴォイ・ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』（鈴木晶訳、二〇一五年八月、河出文庫、九〇〇〜九二頁）
- (13) 同右、九六頁。
- (14) 同右、九六頁。
- (15) 山本正男『融和運動における自覚運動の意義』（『融和事業研究』第八輯、一九二九年十二月、引用は前掲(2)、一九一頁）。
- (16) 前掲(2)、二二八頁。
- (17) 前掲(5)、三八頁。
- (18) 木村京太郎『忘れえぬ人びと』9（『部落』第二六五号、一九七〇年一月、四六〜四七頁）
- (19) 藤谷俊雄『部落問題から見た『青年の環』―戦時下の水平運動』（『部

落」第二三卷第一号、一九七一年一〇月、三一頁。

(20) 同右、三一頁。

(21) 同右、二九頁。

(22) 津田孝『青年の環』論―その革命運動批判を中心に』（民主文学」第七二号、一九七一年一月、一〇四～一〇五頁）

(23) 前掲（3）、三〇一～三〇二頁。

(24) 大阪市社会部編『大阪市社会事業要覧（昭和十六年版）』（一九四一年五月、大阪市社会部庶務課、二二頁）

(25) 『大阪の部落史』第六卷史料編近代3（二〇〇四年二月、解放出版社、二二〇頁）他参照。

(26) 前掲（1）、六三頁。

(27) 前掲（12）、一九頁。

「おにし やすみつ 本学教員」